

砂鉄採取：鉄穴流し

製鉄に使用される砂鉄は、もともとは山の浸食によって下流に流れ込んだ川底の堆積物をふるいにかけて集めていた。しかし、こうして砂鉄を蓄積するのは時間のかかる作業だった。17 世紀後半には、「鉄穴流し」と呼ばれる、より効果的な技法が、この地域で広く採用されるようになった。

自然浸食が起こるのを待つ代わりに、職人が手作業で露出した崖を掘ったのだった。作業員が岩を削り、堆積物を運河に押し込み、山麓の選鉱場まで運んだ。

選鉱場は、徐々に低くなる 4 つのプールで構成され、重い砂鉄を他の堆積物から分離するために使用された。砂鉄は底に沈み、それ以外のものはプールの間の隙間から流れ出た。

これらのジオラマは、雪の降る冬の日の鉄穴流しのいくつかのシーンを表現している。この方法は、土砂の流下によって下流の水田が被害を受ける可能性がある農繁期には許可されなかった。

砂鉄の種類

鉄穴流し製法で採取された砂鉄は、大粒の砂（マサ）と細粒の砂（アコメ）の 2 種類である。

山陰地方（島根県、鳥取県）には粒の大きな砂が豊富にあり、二酸化チタンなどの不純物が少ないため、鉄鋼の原料として欠かせなかった。アコメ砂鉄は主に銑鉄の製造に使用されていた。